

「創造都市」へと進む集客空間の造成方向

- 韓国及びアメリカ都市の創造性分布特性を事例に -

申 星喜 (仁川発展研究院 責任研究員)

・変化を主導する「人」たちと彼らが集まる「場」に注目

ある都市の内部形態がどのように形成されるのかを理解するための地理学の説明の中で比較的広く知られている Burgess(1925)の「同心円理論(concentric zone theory)」がある。この同心円模型と理論は、1920年代にさかんに各国から移民者たちが流入し、住居地が分化された大都市シカゴを観察する事によって誕生したものである。

1920年代、アメリカはヨーロッパからの大量の移民と人口移動により、アメリカの都市が急成長し都市地域が拡大した時期だった。シカゴに定着した移住民たちは人種別、国家別の類似性によって経済的階級も類似するようになり、類似した与件の人々が集まって暮らしながら、都市内部の空間利用の分化がおき、結局同心円形態をなすようになるということを、模式化して説明したものである。このような地理法則を借りなくても、「類は友を呼ぶ(Birds of a feather flock together)」ということわざが示しているように、特定の類型の人々が互いに集まるものだという事は別に目新しい話でもない。この論文の出発はまさにこの「類は友を呼ぶ」の道理から始まるが、次の二つの関心事からより集中して論をすすめていこうと考える。

まず、「どこに」集まるかに対することだ。どこでも、特定の部類と類型の同質的な人々と人口は、ある特定な場-地域及び場所により集中している可能性が高い。



図1 Burgessの同心円模型

次に、「誰」と集まることを望むかということに対することである。我々はみなよい隣人を得たいと思っており、「いい人」たちがより多く「集まって」いる場の環境と特質がより「よくなる」ということを、既に経験的に知っている。とても単純な道理によるものである。それならば今日、地方都市の発展のために、つまり都市が以前よりよくなるために、集まったらよい人々とは、いったいどんな人々なのだろうか。この論文では創造経済社会の到来に対する共感と共に、世界的な反響を起しているアメリカの地域経済学者 Richard Florida の「創造経済」と「創造階級」の出現に対する論議を中心に、アメリカの創造度が高い都市の特長、そして韓国の創造的な人材たちがたくさん集まっている都市を分析し、政策的示唆点を導出しようとするものである。

・創造都市へと進む都市及び創造的階層が集まる場の特徴

今や、大都市を中心として産業経済時代から個人の創意的なアイデアが経済活動の核心的な役割を遂行する「創造経済」時代へと急速に移行しているが、Florida はこのような創造型経済時代の変化を主導する核心要因を「創造的な人々(creative class)」と診断している。したがって、Florida は都市が持続的に発展するためには創造的な人材が好む環境を造成しなければならないことを強調しているのである。

それならば、どのような環境が造成されればこれら創造集団の創造性を都市の空間に拡張・浸透させてゆけるのだろうか。

これは一時的に個人次元の創造性を振興する作業から出発し、組織と空間及び都市全体へと波及させることができる創造環境(Creative Milieu)を造成するものである。このように変化を主導する創造的な集団が好んで集まることのできる場所を計画するためには、まず今までの創造的な集団が、より集中している場、そして創造性が高い都市の特性を分析しなければならない。

1. 3T 指数別 創造度が高い都市の特徴-アメリカの事例分析

Florida は現代経済の新しい担当者としての「創造階級」の登場と浮上に注目して、彼らの気質と仕事及びライフスタイル、そして彼らが選択する共同体の特徴を分析し、創造階級が居住している都市や地域こそが経済的成果が優秀なところであることを具体的な指標を根拠に明らかにした。彼の研究の出発視点はやはり地域経済の危機視点である。産業都市ピッツバーグが相次いで大型工場が撤退し、失業者が滞留する深刻な状況に対して、産業の立地行動を分析する事によって、成長がめざましいハイテク産業の立地要因が創造的な人材である事を明らかにし、地域再生の鍵は工場の誘致ではなく、どのように創造的な人材をその地域に誘引することができるかということにかかっていると主張した。そして Florida は政策的提言として創造的コミュニティを実現するためには「創造性の社会的構造」、特に社会的、文化的、地理的環境(milieu)が非常に重要であり、最近 Robert D. Putnam が主張している社会資本(social capital)よりも「創造資本」がより重要だと主張している。もちろん創造都市に対するこのような視角はアメリカ的な脈絡の中でのみ意味をもつものではないかという疑問も提起できるが、創造的な都市へと向かうためには技術(Technology)、人材(Talent)、寛容性(Tolerance)という3T戦略に立脚して、都市発展戦

略を推進する必要があるという Florida の主張は多くの点で示唆的である(イム・サンホ、2006)。彼は創造的な都市は共通してその都市ならではの真正性と個性を持っており、都市にゲイのような独特な性的趣向を持っている人々でさえも包容する事ができる寛容性(tolerance)を持っていることを実証的に明らかにした。

下の図は Florida(Florida, 2002, 381~389)がある都市の創造度を分析するために開発した三つの指標である技術(Technology)、人材(Talent)、寛容性(Tolerance)の指数を土台にして図解したものである。

まず、創造的階級が大挙して集まる地域は、革新とハイテク産業の中心地だ。ハイテクの先導地域はサンフランシスコ、ボストン、シアトル、ロサンゼルス、ワシントン DC だ(図2)。そして、革新先導地域としてはローチェスター、サンフランシスコ、オースチン、ローリー・ダラムである。特に、ロサンゼルスはシリコンバレーのような産業クラスター形式で先端産業と研究機関が密集しており、これは革新とハイテク産業が創造的人材と強い関連があることを示している(Florida, 2002, 383)。

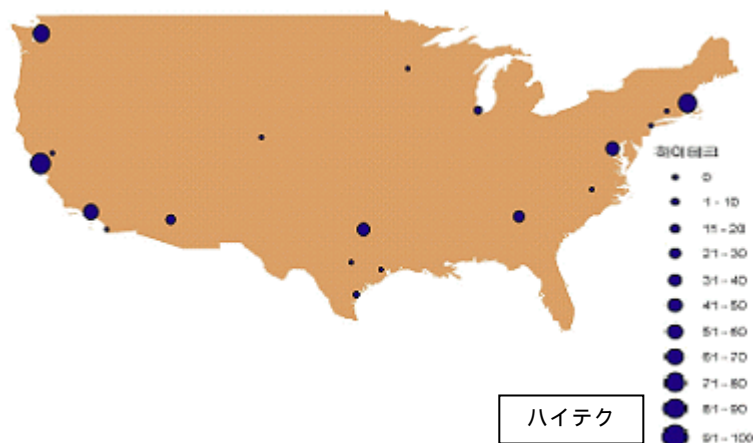


図2 技術指数が高いアメリカの都市(Florida, 2002, 381-389 をもとに図解)

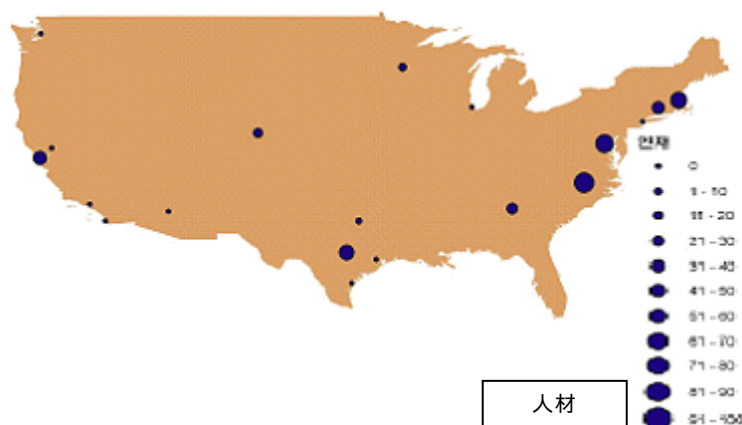


図3 人材指数が高いアメリカの都市(Florida, 2002, 381-389 をもとに図解)

また、もっと小さい大学都市が人材指数で高い順位を占めているが、サンタフェ、マディソン、シャペーン・アバナ、ペンシルバニア州、ステイトカレッジ、インディアナ州 ブ

ルーミントンが高い水準を示している（図3）。Floridaは、これに加えて労働者階級、サービス階級が主流を成している地域はハイテク産業、革新、人間資本、雇用増加が低い水準を示しており、このような都市では創造性指数が殆ど現れないと説明している（Florida, 2002, 372-383）。

次に「ゲイ(gay)指数」はヨーロッパの伝統的な高級文化を志向するエリート層ではなく、より開放的で移動性が高い人口集団の創造性を表す指標である。下の図4に見られるように、ゲイ指数が高いアメリカの都市としてはサンフランシスコ、ラスベガス、ロサンゼルスなど、主に西海岸沿いに密集しており、相対的に保守的な東部ではゲイ指数が低く現れている。

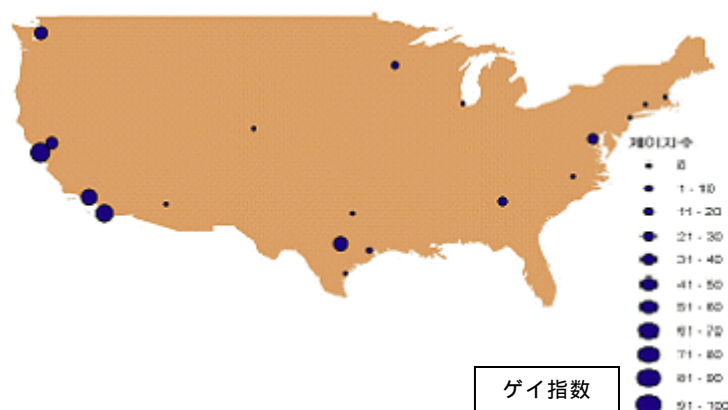


図4 ゲイ(gay)指数が高いアメリカの都市(Florida, 2002, pp.381-389 をもとに図解)

Floridaの分析によると、技術指数と人材指数は地域的な関係がある。サンフランシスコやオースチンなど、最近注目されている成長地域は二つの指標がどちらも高くなっている。ボストン、ニューヨーク、ワシントンDCのような安定した東部地域もやはり創造的指数が高く測定されており、人材指数とハイテク指数が卓越したものとして表れた（図5）。反面、創造性指数は大きな都市に利点があるが、これを独占的に掌握してはいないことを示している。より小さい地域サンタフェ、マディソン、オルバニーは、創造性指数で高い点数を占めている。（Florida, 2002, 373-374）

注意を傾けなければならない点としては、Floridaが、創造的な人々が集まっていることによって形成される創造的資本力とは、地域発展が経済発展の3Tがすべて「いっしょに」存在する時にだけ発揮されるのだということを強調しているという点である。

ボルティモア、セントルイス、ピッツバーグには技術基盤と世界的な大学もあるのだが、特別な成長を見せることができないでいる。その理由はこれらの地域が最高の創造的な人材を引き入れて土着化できるほどには、広大で開放的な雰囲気ではないからだということだ（Florida, 2002, 382）。また、マイアミ、ニューオーリンズのような都市が生活様式のメッカであっても、技術基盤が欠乏しているために創造的成功をなす事ができないでいると説明している。

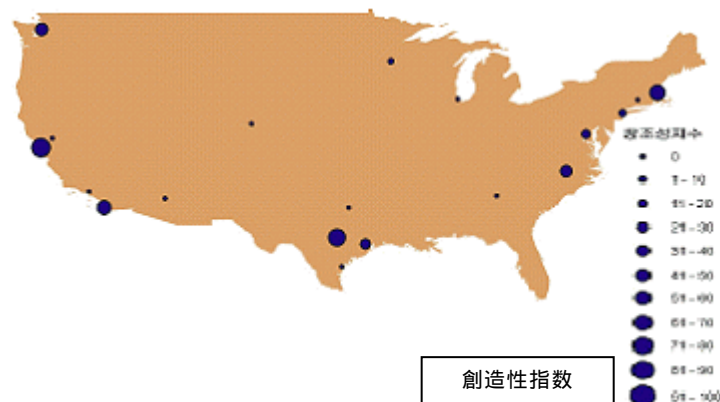


図5 創造性指数が高い都市の分布 (Florida, 2002, pp.381-389 をもとに図解)

2. 韓国-7大広域市間の創造的人材の分布と特徴

Florida が「創造階級(creative class)」と呼んだ社会階層は「創造の核」分類と「創造の専門職」とに分けられ、前者は<コンピューター・数学、建築・エンジニア、生命・自然科学及び社会科学、教育・訓練・図書館、芸術・デザイン・エンターテインメント・スポーツ・メディア>分野に、後者は<マネージメント・ビジネス・法律、保険医・技師、セールス・マネージメント>の各専門職種によって区分される。1999 年前者は 1,500 万人でアメリカの就業者全体の 12%、後者を含む「創造階級」全体は 3,830 万人に至り就業者全体の 30%を占めた。特に「創造階級」の中心となる「創造の核」分類には IT 及びバイオなどの自然科学界の研究開発分野と革新(Innovation)に関係した職業群だけでなく、映像・音楽・舞台芸術・メディアアートなど芸術界の職業集団も含まれている。

それならば、韓国の創造性を発揮する高級人材たちはどこに集中しているのだろうか。下の表は地域別国民年金加入者数と年金納付額を調査したもので、この中で表に表れた「5 等級加入者」は所得月額が 3,450,000 ウォン以上である人々の数値であり、全体給与所得層の上位 10%内に含まれる高所得層に属する。

従って、国民年金加入者中の 45 等級加入者数値によって地域間高賃金人材の分布状況を知ることができる。これらの地域的分布状況をより空間的に理解するために下の表に表れた資料を図解してみた(図 6)。

表1 地域別国民年金加入者

(単位: 人, %)

区分	総加入者		45 等級加入者		45 等級加入者 比重(B/A)
	加入者数(人)(A)	比重(%)	加入者数(人)(B)	比重(%)	
ソウル	3,909,991	31.3	664,804	51.6	17.0
釜山	803,198	6.4	44,569	3.5	5.5
大邱	520,365	4.2	21,931	1.7	4.2

仁川	569,019	4.6	39,842	3.1	7.0
光州	295,044	2.4	19,428	1.5	6.6
大田	306,242	2.5	27,926	2.2	9.1
蔚山	264,931	2.1	44,768	3.5	16.9
京畿	2,434,657	19.5	211,805	16.4	8.7
江原	290,531	2.3	10,923	0.8	3.8
忠北	326,479	2.6	14,381	1.1	4.4
忠南	453,096	3.6	27,355	2.1	6.0
全北	369,921	3.0	13,782	1.1	3.7
全南	390,330	3.1	19,224	1.5	4.9
慶北	661,386	5.3	59,120	4.6	8.9
慶南	778,676	6.2	64,073	5.0	8.2
濟州	116,124	0.9	4,038	0.3	3.5
合計	12,489,990	100.0	1,287,969	100.0	10.3

注：地域加入者中で納付例外者は除外した。

資料：国民年金管理公団

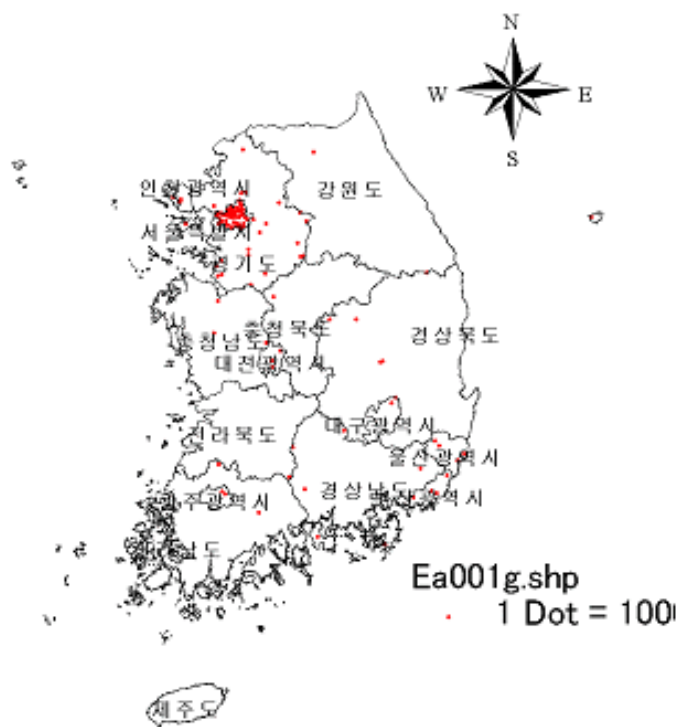


図6 高所得賃金労働者の分布 - 国民年金 45 等級加入者数(B)-全国市道別

図6を見ると、これらの高賃金人材は特に首都圏に集中分布しているが、大都市間で比較してみても首都圏と非首都圏の地域間賃金所得の格差が甚だしい違いを示している。特に大邱広域市、全羅北道、江原道、済州道は、他の地域に比べて高賃金人材の集中度が相対的に低く表れている。

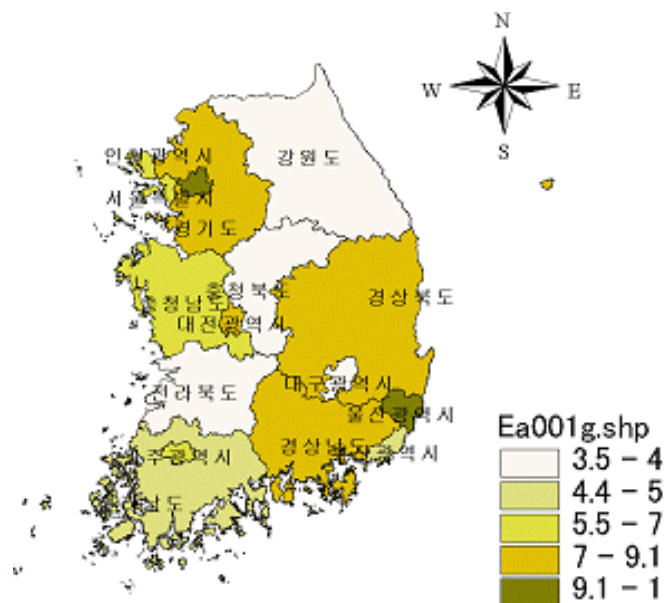


図7 高所得賃金労働者の分布 - 国民年金 45 等級加入者数(B)-全国市道別

図7は国民年金総加入者対比45等級加入者比重を表したものだ。やはり全体的にいわゆる京釜軸を中心としてその比重が高く表れており、他の広域市に比べて光州広域市と大邱広域市はその比重が低い。また、済州道、全羅南北道、忠清北道、江原道もやはり相対的にこの比重が低く表れている。これらの地域は統計数値上、総加入者比重及び45等級加入者比重の両方ともにこの中で低い。

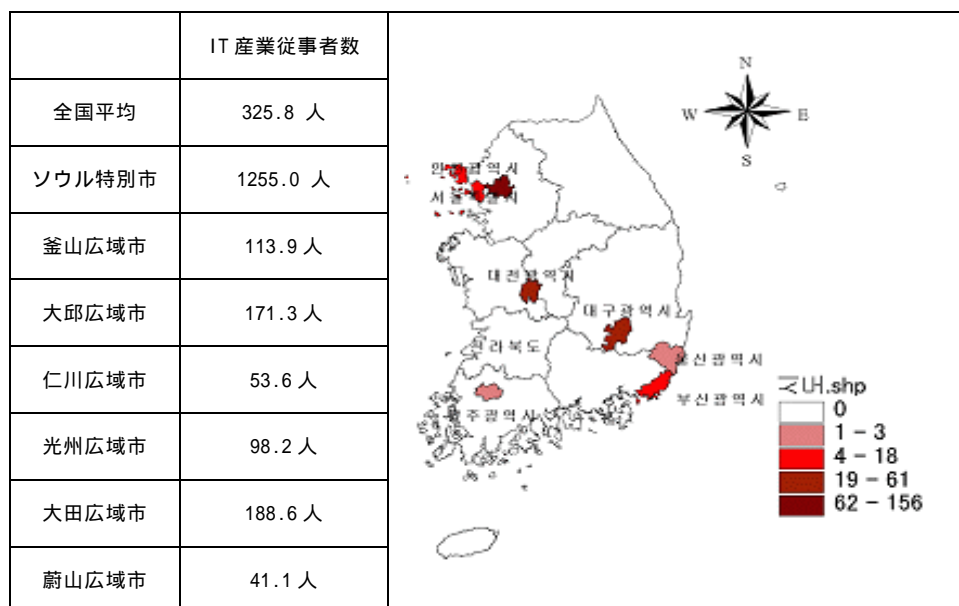
図8は、韓国の大都市間における創造的集団の分布状態を把握するために7大広域市のIT産業と文化産業関連のそれぞれの核心分野の従事者比重を分析し、その分布特性を図解したものである。

7大広域市間IT関連研究人材従事者の比重は、ソウル、大田、大邱の順に高い数値を示しており、相対的に蔚山の比重が低く表れた。

大田市のIT関連研究人材従事者比重が高く表れていることは先端研究・開発機能が集中している大徳バレーの影響と関係が深いものと解析される。IT関連研究人力従事者の比重に関しては、蔚山と光州の二都市がその比重が低く、類似したグループに属している。この中で蔚山はこの地域の基盤産業が造船業と自動車産業など既存の重工業及び製造業中心であることから、上の図解の結果を理解する事ができる。

一方、プログラマー(programmer)は未来志向型先端産業群においても核心的な役割を担っている創造階級をなす代表的な集団である。従ってこれらプログラマーの地域的な特性を分析する方式は、地域間の創造的な生産性の高度化の程度を見定めることができるよ

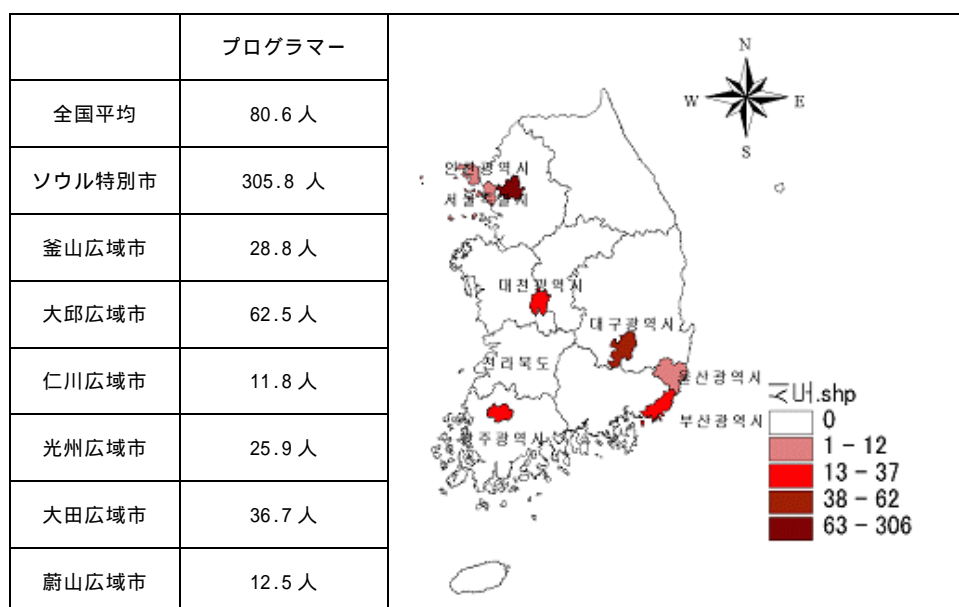
い尺度となりうる。このようなプログラマーの集中度はソウルが独歩的な位置を占めている(図9)。一方、大邱もIT産業従事者中のプログラマーの比重が非常に高く表れている。光州と大田、釜山広域市もやはりプログラマー従事者比重が高い。仁川と蔚山はプログラマー人口が相対的に低い。



資料：「市道/産業/職能別従事者現況」(統計庁)から再作成

注：韓国標準産業分類「情報処理及びその他コンピューター運用関連業(72)」に該当する従事者である

図8 7大広域市人口10万人当たりIT産業従事者の比較 - 研究人材

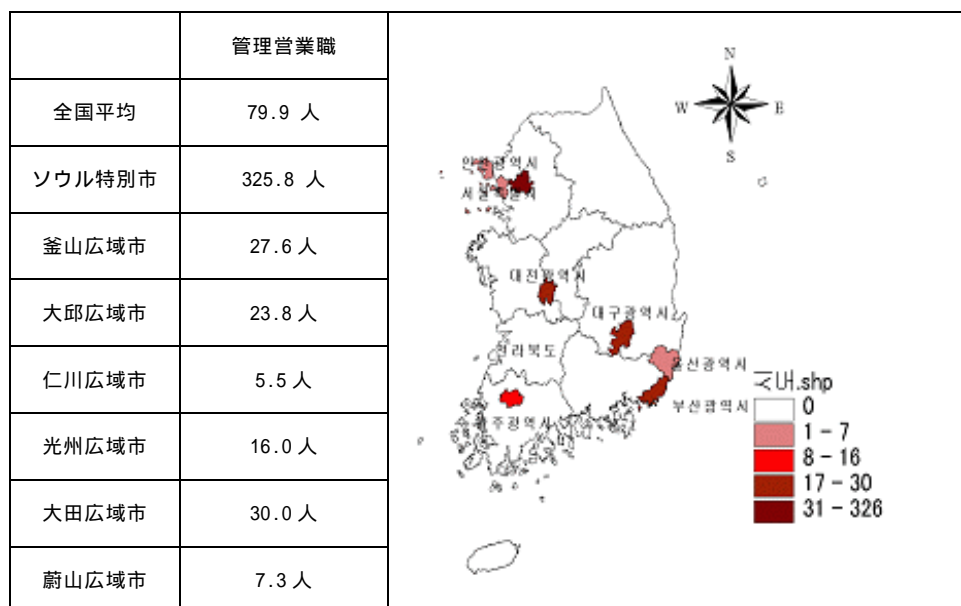


資料：「市道/産業/職能別従事者現況」(統計庁)から再作成

注：韓国標準産業分類「情報処理及びその他コンピューター運用関連業(72)」に該当する従事者である

図9 7大広域市人口10万人当たりIT産業従事者の比較 - プログラマー

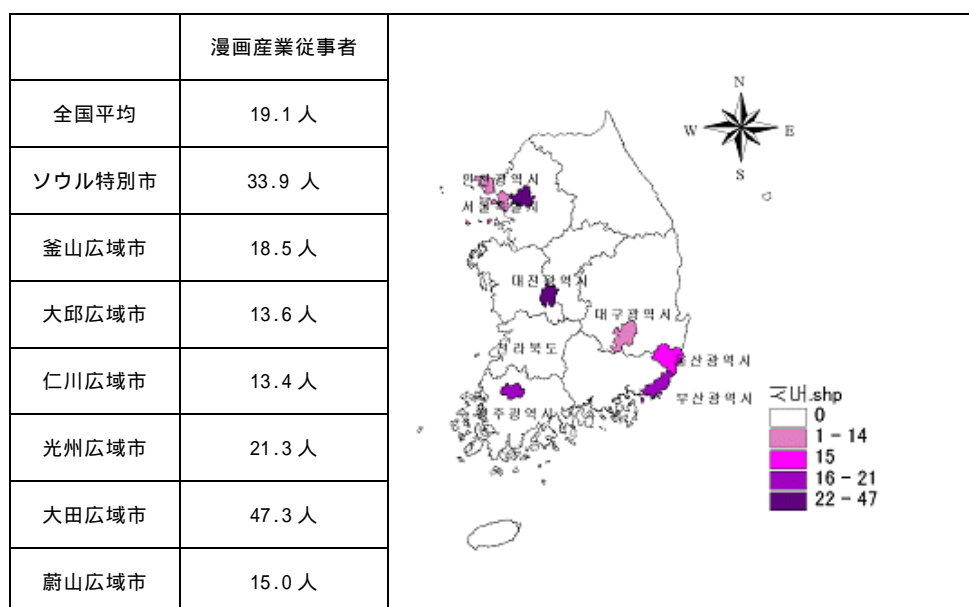
IT 業界の管理・営業職は相対的に、より高所得層、高学歴層で構成されている高度化された高級創造階層として見る事ができる。他の広域市に比べて仁川と蔚山の IT 業界管理営業職の比重が低く表れた。一方、いわゆる京釜軸を成す 4 大都市では相対的に IT 関連業界の管理・営業職の比重がより高く表れている。



資料：「市道/産業/職能別従事者現況」(統計庁)から再作成

注：韓国標準産業分類「情報処理及びその他コンピューター運用関連業(72)」に該当する従事者である

図 10 7大広域市人口 10 万人当たり IT 産業従事者の比較 - 管理営業職



資料：「2005 文化産業統計(分化観光部)」から再作成

図 11 7大広域市人口 10 万人当たり文化産業従事者の比較 - 漫画産業従事者

IT 業界の管理・営業職の従事者比重の分布を図解した下の図 10 の結果を通して、創造的階層内でも創造的生産性がより高度化された高所得人材がより集中している地域があり、人材の分布パターンが存在する事を示唆している。

漫画産業は創作と印刷、文学と美術、そして多様なキャラクター産業など、アナログ的な創作の源泉から、デジタルイメージから映画産業にまで無尽蔵に拡張が可能な代表的な「ワンソース・マルチユーズ(OSMU)」を急速に進行させることができる分野である。従って、今後アナログ的な創作基盤の拡充と、デジタルコンテンツ産業を成す有望な文化産業の核心分野として展望される。それゆえに漫画産業従事者の比重が高い地域であるほどに、今後活発な文化的創造的活動の潜在性が高い所として期待することができる。このような漫画産業従事者の比重はソウルではなく大田が最も高い数値を示しているという点が注目される(図 11)。

・創造度が高い都市の特性と政策の示唆点

経済学者である Florida は指数を開発して、これによって都市の分布を単純な統計表で表したので、創造性と関連がある指数が「どこに」高く表れるか、言い換えれば創造都市は「どこに」位置する特性を見せているか、或いは「なぜ、そこで」創造性が高くなっているのかに対する説明には踏み込む事ができなかった。

これに関連して、まず、三つの創造指数の中で特に<ゲイ(gay)指数>は伝統的な高級文化を志向するエリート層ではなく、開放的で移動性が高く、そして非常に創意的な人口集団の集中度を表象する点でより注目しなければならないということを強調したい。<ゲイ指数>は相違性と多様性が集まる場所の特徴を十分に表していると同時に、性的少数者であるという社会的に簡単には包容されにくい集団でさえ、自分の実力を発揮して働き、居住することができる都市としての条件が何であるかを非常に強く表していると見ているからである。

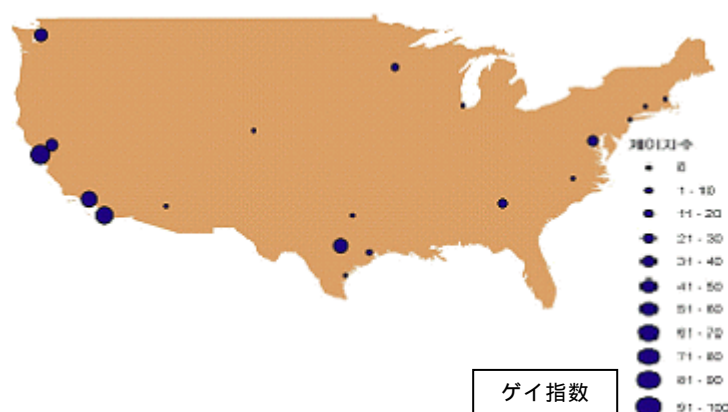


図 12 ゲイ指数が高い都市の分布

つまり、従来の保守的で閉鎖的な雰囲気のある場所では、その社会と一つの組織の一員として受け入れられにくかった性的少数者たちでさえ、集まって働き居住し楽しむ事ができる

所であれば、その場は「違い」と「差」を認める態度と包容力が高い場所であるということだ。言い換えれば「多様性」が集まる環境である事を意味している。産業政策では新しい事業が始めやすく、その事業を活性化させることができる「進入障壁が低い」産業が重要だと考えるが、同じように新しい人々に対する地域の進入障壁が低い事が重要である事を示唆している。つまり、新しい人々が全て社会的、経済的序列に受容される地域は高い創造性指数を得ることができるという点が重要である。

また、この論文では韓国の創造的人材の分布状態を把握しようと、IT、CT(文化)産業と関連したいくつかの核心分野の従事者を抽出して7大広域市間の分布を考察してみた。一旦、IT業界研究開発人材、管理営業職従事者、文化産業関連核心人材と、高賃金人材は絶対的に「ソウル」に集中分布している事がわかる。しかし次世代型創造経済社会で価値を創出することができる創意性と技術力を備えた創造的な人々は Florida もやはり指摘しているように高い移動性を見せる特性がある。今後これらの創造集団はソウルにだけ安着するのではなく、彼らが好み、彼らの実力がもっともよく発揮され、認められる与件と環境を求めて、多様な地域と場所に移動して定着するものと予想される。

次に、アメリカの場合、創造指数が高い都市は大部分「海岸」に位置しているという点に注目すべきである。



図 13 海岸に集中分布するアメリカの主要創造都市

従って、なぜ特に海岸地域に立地している都市が高い創造度を見せているのかに対するより精巧な分析は今後要求される興味深い研究議題となるであろう。

これと関連して最近日本の北九州市立大学都市政策研究所でも「都市に活力を吹き込む人」たちが多く集まっている都市の立地特性を分析しているが、その結果河川敷、海岸沿いなどの立地が「高い集客力」と密集した相関関係を見せているという点を明らかにした(内田・片岡、2006)。海岸及び水辺は陸地と海(水)というそれぞれの独特な地理環境・生態的、人文的特性を持った三つの空間領域が結合する所であるという点は明らかであり、海岸地域や水のそばにある水辺地域は、このような空間的多様性が極大化した場所である。従って図 14 の図解結果はこのような立地および空間的利点が創造都市の重要な条件になるということの意味している。

このような結果から見ると、東北アジアの都市は今までのどんな時よりもより親水的

な政策樹立が必要な時点に来ていると言える。

親水的な政策樹立を提起する事は単なる親水空間や水辺の開発及び活用の多角化だけを意味するのではない。超経済的国際化、空間的多様性及び疎通と交通の極大化という側面から、より積極的に考えなければならない「海岸(海)志向」戦略を強調するものである。たとえば、仁川は伝統的に内陸都市ソウルの外港都市としてソウルを海洋と連係させてきた。北朝鮮の第1都市平壤または内陸に位置しているが、南浦市は仁川のような平壤と海をつなぐ外港都市として機能してきた。従って内陸都市ソウルは伝統的な交通・物流中心の外港都市-内陸大都市の連係に優れた次世代型海洋志向連帯が必要になるであろう。

北九州や仁川は到来する西海岸時代(韓国の西海岸)を先導する事ができる「海岸都市」である。このような海岸都市は自生的な発展法案だけでなく、都市として備えることができる最大限の利点を備えた周辺の「大都市」との、より有機的な連係を必要としている。結局既存産業型都市が次世代型価値創出を可能とする都市として成長し、変態してゆくためには、このような変化を主導する人々を最大限誘致することができることがこのような海岸都市の重要な課題となるであろう。現在アメリカと韓国の都市の場合、このような創造的人材は主に巨大都市を中心に布陣している。しかし、次第に彼らが好み認められる条件を備えた多様な都市及び場所へ移動してゆく事が予想される。従って次世代型集客都市の造成法案に対する研究は、大都市に集中している次世代型「人材」を誘引する事ができるように、彼らが好む場所及び環境に対する精密な分析を通じて都市の至るところに創造的な環境及び場所を計画し造成する具体的な手法を開発することへと進むことが求められている。

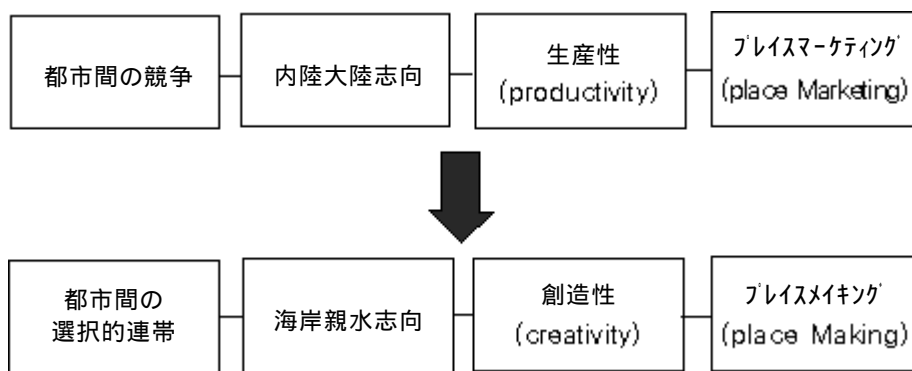


図 14 創造都市へと向かう集客都市戦略の方向

参考文献

- 1) クォン・サンチョル (2005) 「わが国の首都圏としての人口移動：時期別流出地域の特性と移住者選別性の相対的重要度評価」韓国地域地理学会誌、第11巻、6号、pp.571-584
- 2) ムン・ソンベ、ホン・ドンピョ (2005) 「IT投資と企業組織の相関関係及び生産性に与える効果」経済学共同学術大会発表文
- 3) シン・ソンヒ (2006) 「場所の選択的造成と資産化」ソウル大学校大学院博士學位論
- 4) シン・ソンヒ (2006) 「集客空間の造成技法と事例分析」北九州市立大学都市政策研究

所 - 仁川発展研究院研究交流発表会資料集

- 5) イ・ウンウ(1997)「地域間の生活の質の差と人口移動との関係」経済学論集、第7巻、2号、pp.233-253
- 6) イ・クォンヒョン(2006)「東北亜時代の仁川経済発展課題：産業構造高度化政策を中心として」政策企画委員会主催政策討論会『東北亜時代、韓国の進路』発表論文
- 7) イム・サンオ(2006)「創造産業の材料としての地域文化と都市空間の活用」仁川広域市文化政策討論会資料集、pp.92-104
- 8) 佐々木雅幸(2001)「創造都市への挑戦」韓国訳、小花
- 9) 内田晃、片岡 寛之(2006)「次世代に向けた集客力都市研究」北九州市立大学都市政策研究所 - 仁川発展研究院研究交流発表会資料集
- 10) A. J. Scott(2006)「Creative Cities Conceptual Issues and Policy Questions」Journal of Urban Affairs
- 11) Amsden, A Asia's Next Giant(1989)「South Korea and Late Industrialization」Oxford University Press
- 12) Florida. R. Creative Class. イ・キルテ(訳)(2002)「創造的変化を主導する人々」電子新聞社
- 13) Landry. C(2000)「The Creative City」A Toolkit for Urban Innovators. London : Comedia
- 14) Wade, R(1990)「Governing the Market : Economic Theory and the Role of Government in East Asian Industrialization, Princeton, N. J.」Princeton University Press